

トランスジェンダー

をいきる

(3)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

幼少期(2)

前回は、自己の性自認が男の子であると確信し、祖母との暮らしを通じて、自己の性別のあり方や行動様式を規定した結果、独特で時代錯誤的な様相を持った定義の仕方をしていったところまで記述した。

その一方で、男の子でありながら、他の男の子とは相容れない性質におぼろげながら気づき始めた時期でもあった。今回は、そうした時期を、「陰の側面を感じた時期」として捉え、自己物語の記述に基づいて詳述する。

1 「なんか違うでえ」

自己の性自認が男の子であると革新していながら、一方で、他の男の子とはどこか異質な側面がある、という感じ方を、当時の心境になって率直に表現すれば、「なんか違うでえ」になる。特に、兄貴と同じような行動をしたとき、父方の祖母や両親は、必ず女の子であることを理由に私を叱責した。一見自明のことのように思われるこの厚意が、当時の私にとってはいつも納得のいかない結果を残すだけであった。その腹いせに、例えば兄貴とのおもちゃの取り合いや、テレビのチャンネル争いの際に、殴る・蹴る・噛み付くなどの暴力となって、兄貴の身体を攻撃することでストレスを解消していた。

しかし、そうした暴力性の裏側で、常に心理的不安定さにさいなまれていたことも事実

であった。それが「なんか違うでえ」という表現から生み出された「なんか」であり、その「なんか」は、容易に言語化できない迷路のような複雑な感情、いや、もっといえば、言語化してはいけないタブー感であった。そしてこの複雑な感情やタブー感は、素朴な疑問として率直に大人たちにぶつけることをためらわせ、この時期にありがちなさまざまな「なんで？」という質問リストから自然に締め出してしまった。

他の男のことは「なんか違うでえ」という感じ方は、その後、次項から詳述するように、徐々に明確化して、自己の身に降りかかることになる。

2 独特で奇妙な恋愛事情

「初恋の時期は？」と聞かれると、ほとんどの人たちが3, 4歳ごろから小学生のころの年齢のようだ。私もご他聞に漏れず、初恋は3歳から4歳ごろであった。しかし、このころから、私の恋愛の特徴が独特かつ奇妙であることに気づかされる。

ある音楽番組を視聴していたとき、ダークダックスやボニージャックスの歌が流れてきた。いずれも、男性ばかりのグループであるが、私はテノールパートを歌っていた男性のやさしい歌い方に心を引かれ、胸騒ぎや動悸・心理的搔痒感を覚えた。そして、番組終了後、しばらくの間、その歌を思い出したとき、無意識のうちにそのような感情を抑えるかのように、部屋の中を走り回りたくなるような荒々しい衝動に駆られ、悪戯や物を破壊したいという粗暴な行動に出てしまい、父方や両親の怒りを買ひ、女の子らしくすることを求められ、そのたびに極端な「恥辱感」に陥る羽目になった。このサイクルは、一定期間継続し、やがては自然消滅していった。

おりよく、当時、「恋する、、、」という文言のCMが、執拗にテレビから流れていた。私はこの「恋」という言葉にこめられている意味が、ダークダックスやボニージャックスの歌を聴いたときの一連の「症状」なるものと、その後の荒々しい行動や粗暴な態度、そこから派生する父方の祖母や両親からの怒りを買うことや、女の子らしくすることを要求された際に生じる極端な「恥辱感」という構図とが一致していること、つまり、ダークダックスやボニージャックスのテノールパートを歌っている男性が「好き」という恋愛感情を抱いていることを、子供心に知らされ、これが「初恋である」と確信したきっかけとなった。

しかし、この初恋のあり方が、当時メディアや周囲の大人たちによって植え付けられていた「恋心を抱いたときの女の子の心」、すなわち、「しとやかでうつむき加減、ケア役割を發揮する」などの行動様式とは程遠いと感じていた。それは、特にその後の恋愛に陥った際に、兄やいとこの男の子たちと遊んでいたとき、確かに一連の「症状」なるもの、不必要な荒々しい行動や粗暴な態度は軽減するものの、「男の子を性愛の対象とする女の子の私」を演出しなければならないという苦痛や、FTMゲイの恋愛は容認されない、という疎外感や恥辱感といったものは、軽減されるどころか、ますます顕著になっていった。当時、兄に好きな女の子がいたかどうかは別として、兄を含めた周囲の男の子たちの私に対

するまなざしが、「男の子を好きになり、その男の子のために、女の子としてかいがいしく世話をする」という図式によって規定されていると感じさせられた瞬間、(確かに男の子は好きだが、それは女の子としてではなく、男の子として好きなんだ)というFTMゲイの側面を否定せざるを得ないという疎外感が、自ら恋愛市場への積極的介入を阻んだといえるだろう。

3 女の子の身体であることへの違和感と、男の子のジェンダーであることの不一致の始まり

私は父や兄と一緒にいることが大好きであった。プロレスごっこのような遊びを通した身体接触も楽しかったが、3人で食事をしたり、ただ一緒にいること事体に、男の子としての性自認を強め、満足していた。

あるとき、父と兄の3人で、家の近くの川で立ち小便をしようということになり、誰の小便が一番飛ぶかを競うゲームをした。子供のころから、何かにつけて兄と競争して勝つことを目標にしていたので、このゲームも絶対に勝つと決め込んでいた私は、立ち小便をした際、自己の小便が父や兄のとは異なり、下にだらしなく地に落ちたことにショックを受けた。そこで父に、「なせ、私の小便は飛ばないのか」と聞いてみた。すると、父からあっさり、「お父さんやお兄ちゃんはちんちんがあるから、おしっこが飛ぶんや。お前は女やからちんちんがないし、それでおしっこが飛ばへんのんや」と言われた。そこですかさず、「でも、私にもそのうちちんちん生えてくるやろ?」と聞いてみると、またまたあっさり、「お前は女やから、ちんちんは生えてきいひん」と言われた。このような父との会話は、一見すると4、5歳の子供と父との何気ない会話に聞こえるかもしれない。しかし、当時の私は父の「お前は女やから、ちんちんは生えてきいひん」という言葉は、単に「ペニスは生えてこない」という以上に、父からの「ペニスを持たない体としての宣告」として、私の前に立ちはだかった。それは、父と兄とは相容れない性質、つまり、「男」ではなく、「女」であることで、男性同士のホモソーシャルな関係性から排除されたことへのショックと悲哀を意味した。

しかし、私も気持ちの上で負けてはいなかった。将来ペニスが生えてくることへの一縷の望みを抱きつつ、なおも父に食い下がった。しかし、父からの答えは変わらなかった。

父に「ペニスを要求する」という行為は、どう考えても無謀である。しかし、当時の私の父に対するこのような行為は、父からの「男ではない」、つまり、「女であること」の宣告を受けたショックと悲哀におののいている自己を鼓舞するための叱咤激励であった。しかし、そのような自己への叱咤激励も、父からの2度にわたる「ペニスを持たない体としての宣告」によって見事に打ち砕かれ、それ以上食い下がってペニスを要求することを許されなかった。自己の身体の性別に強烈な違和感を覚え、かつ、ジェンダーの性別との間の不一致を証明させられた瞬間であった。

このような体験は、FTMの、特に身体的違和感が著しいトランスセクシュアル(TS)に

において顕著に見られ、さまざまな手記やインタビュー調査を基にした研究論文においても、ペニスへのこだわりや欠損感についての語りが見受けられる。

4 「自己物語の記述」から見えてくる光と影

以上詳述したように、自己の独特かつ奇妙な恋愛のあり方と、身体が女の子であることへの違和感・それに伴う男の子のジェンダーであることの不一致によって、他の男のことは異なった様相が明確になり、「なんか違うでえ」という感じ方の「なんか」の正体が鮮明になってきた。「自己物語の記述」を元に、前回の投稿と合わせて次のように考察する。

自己の不の側面や感情を赤裸々に記述し、論じることによる「影の重要性」の焦点化「自己物語の記述」に当たってのルールとして徹底して行っていたのは、「自己にとって都合のよいエピソードだけではなく、負のエピソードも含めて記述する」ということであった。そこで、今まで封印し、決して語ってはならないとしてきた、あるいは社会から要請され、教え込まれてきた負の感情や負の部分を赤裸々に論じたことによって、自己の中に内面化している暴力性や排除の構造が露呈してきた。兄への暴力行為という負の行動様式の中に存在していたのは、他の男の子とは「なんか違うでえ」の「なんか」の側面が、容易に言語化できなかつたことによる過活動・行動化として表出したものであり、「身体が女の子」という社会的立场上許されないことの裏返しであることが明らかになってきた。このようにして、負の感情や負の側面を、その時期の「影の部分」として赤裸々に語り、論じることであえて焦点化することによって、今まで気づかなかつた自己の行動様式に隠されていた重要な問題性に気づかされた。

自己の体験を社会化する

「自己物語の記述」によって、自己の体験を可視化するという作業を通じて、その可視化した自己の体験を、単なる個人の体験に留めるのではなく、そこから浮かび上がってきた問題を社会化することで、社会の負の仕組みにも目を向けるようになり、あらゆる視点が開かれるようになった。恋愛市場への消極的かわりというものは、すでにこの時期において、異性愛中心であること、FTM ゲイである自己野恋愛のあり方それ自体への忌むべき感情が、すでにこのころから存在していたことが明らかになり、社会の恋愛のあり方に対する厳格で排他的な側面を垣間見ることができた。「恋愛は二人でするもの」、「男の子にはペニスがあり、女の子にはペニスがない」という事柄が、性別二元論に基づいて自明のように語られることによって、社会に対して身動きが取れないような閉塞感を抱き始めたのもこのころからである。

このようにして、特にこの時期の影の部分を考察することで、その影の部分から光を見出し、その後の行動様式の傾向性を省察することができるのである。

5 終わりに

「光があれば、陰もある」。これは一見すると自明なことであるが、ともすれば光に多く

の焦点が当たりがちになり、陰の部分を排除してしまいたくなる。しかし、「自己物語の記述」は、焦点が当たりやすい「光」よりは、むしろ「影」の部分に焦点を当てるというスタイルによって、そのエピソード特有の問題性が浮かび上がってくる。更に、その問題を社会科することで、社会の負の仕組みをも垣間見ることができ、今まで光であると思っていた事柄が、実は影の部分を構成していることにも気づかされた。

次号からは小学生時代のエピソードを分析するが、ますます「影の部分」への考察によって、更に問題が明らかになってくる。どうかお楽しみに。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士過程）

科後期博士過程）